

3rd Annual N.E.A.R. Language Education Conference 第3回北東アジア言語教育学会

Conference Preview - Poster Session

日本語複合動詞の V1+V2 結合と動詞の自他について

杉村泰, 名古屋大学

Room 103

日本語の複合動詞 (V1-V2) について、影山 (1993) は次のような「他動性調和の原則」が働いていることを指摘している。

- a. 他動詞: (x < y>)
- b. 非能格自動詞: (x < >)
- c. 非対格自動詞: < y>
 - ・ a + a、b + b、c + c、a + b、b + a…可
 - ・ a + c、b + c、c + a、c + b…不可

しかし、「食べ慣れる」や「読み疲れる」は a + c であるにも関わらず自然である一方、「*買い返す」(「買い戻す」は可) や「*壊し果たす」は a + a であるにも関わらず使えない。このような V1 と V2 の結合は陳 (2008) や張 (2009) に指摘されているように、日本語学習者にとって習得が難しい。

そこで Web 検索で「～疲れる」、「～慣れる」、「～飽きる」、「～直す」、「～切る」、「～尽くす」、「～果たす」、「～果てる」などの特徴を見ると、次のようなことが分かる。

- ① 一般的に「走る」は自動詞、「食べる」は他動詞とされているが、ともに「動作主志向性」を持つ点で共通する。
- ② 「走り切る」の「走る」は他動詞的、「走り尽くす」の「走る」は自動詞的に機能している。
- ③ 「疲れる」、「慣れる」、「飽きる」は「切れる」や「壊れる」のような典型的な非対格自動詞ではなく、非能格自動詞に近い性質を持つ。

以上の事実により、本発表では複合動詞教育において、「動作主志向性」や「対象志向性」に基づいた動詞分類が必要であることを主張する。

参考文献

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 張威 (2009) 「小学校国語教科書に対する複合動詞の実態調査とその分析 —第二言語習得学習ストラテジーの改善をめざして—」『北研学刊』第 5 号, 広島大学北京研究中心, 白帝社
- 陳曦 (2008) 『关于日语复合动词的习得研究』中国社会科学出版社
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』第 114 号, 日本言語学会, pp.37-82

NEAR

北東アジア言語教育学会
Language Education Conference